Akita University

原著：秋田大学医学部保健学科紀要12(2)：105－113, 2004

下田歌子の書物にみる明治・大正時代の「家庭の看護」

小稗文子　石井範子

要　旨

明治・大正時代の女学生や婦人達に影響を与えた，教育者下田歌子の書物から，家庭における看護について分析した．

明治26年から明治39年までの書物の特徴として，病院は少なく看護師の教育は始まったばかりである．そのため，看護は家庭で行われるのが主流であり，その必要性から看護の方法が記載されていた．内容は，体温，脈拍測定や性状，嘔吐時の対応，清拭の方法など述べられている．明治39年以降は病院での施設看護の発展と伝染病予防に対する衛生の啓蒙活動等から，健康の保持増進・衛生について記載されるようになった．このように社会背景の変化によって，書物内容が変化していると考える．

1．はじめに

現代では高齢社会，医療費等の問題から在宅での介護が増え，それに伴い在宅介護の方法や看護の書物が数多く発刊されている．

看護に関する書は江戸時代にはかなり出版されており，その内容は，看護は家庭が中心であり家庭生活の心得の中で看護の必要性を説いていた[1]．歴史をさかのぼると，家庭における看護は時代の流れに従い，文明，戦争，医療の発展等様々な社会因子の影響を受けて変化しつつ，いつの時代も人々の暮らしの中で行われてきた．

現代では病気になると病院等に行き治療や看護を受けるのが一般的である．しかし，明治18年からナイチンゲール方式の看護教育が始まり，明治の中頃まではこのような訓練を受けた看護師はごく少数であった．従って，病院での施設看護はまだ発展途上のため，医師を家に招いて医療を受け，看護は家族が行なうのが主流であった．

明治時代の主な社会問題は，伝染病，戦争，貧困であり，そのような時代に，家庭でどのように看護を行っていたのだろうか．

注目されるのは，「看護」は女子教育の中にとりあげられたことである．亀山は女性雑誌を中心として，明治の女子教育における看護の位置づけを研究し，その中で看護は女性の特質を生かせるものとして，教育関係者や医療関係者から高く評価されたことや，女子教育の定着・良妻賢母主義の確立に伴い「看護」は女子教育に必要な教養として位置づけられたことを明らかにしている[2]．

当時の女学校のテキストをみると[3)~9)]，主婦のたしなみとして家庭看護の方法について書かれている．明治時代は家庭の主婦が病人の世話をすることは当然の努めとされており，女学校のテキスト以外にも一般婦人向けに出された書物に，看病の方法について記載されている[10)~17)]．

明治時代，主婦や女学生の座右の書として版を重ね，当時は大きな影響力をもったとされている[18)]下田歌子は女子教育の中で，家庭看護の重要性を述べている．これまで下田歌子の研究は女子教育の分野では研究されているが，家庭の看護については研究されていない．

そこで，本研究は下田歌子の書物から家庭の看護が啓蒙された社会背景を分析することを目的とする．

秋田大学医学部保健学科看護学専攻

Key Words: 下田歌子
明治・大正時代
家庭の看護

Akita University

用語の使い方：下田歌子は「看護」「看病」を混在して用いており，明確に定義されていないためそのまま使用する．尚，本論文の筆者が使用している「看護」は，家庭で主婦が行う介護や看病を意味している．
「 」は看護や女子教育に関することば，『 』は書名とする．

2．研究方法

下田歌子に関する著作は，下田歌子電子図書館[19]にて調査し入手した．明治期に発刊された物については，国立国会図書館所蔵の明治刊行図書のデータベースより入手し，計14冊を分析対象文献とした（表1）．文献を精読し年代順に整理し，看護に関する内容を抽出し表にした（表2）．

明治26年から明治39年までの書物の中には「看護」，「看病」が記載されていた．しかし，明治39年の『女子の衛生』以降「衛生」について記載が増えている．そのため，明治26～39年までの書物，明治39年以降の書物に分けて内容を述べることにする．

社会背景を把握するための一次資料として，『学生百年史』，『医制百年史』を使用し，二次資料として，明治の看護教育，女子教育，生活史に関する文献を使用した．

3．明治・大正時代の下田歌子書物にみる「家庭の看護」とその社会背景

1）　社会背景

（1）女子教育政策の方針

日清戦争を契機に，国家に捧げる強兵を産み，その家を守る女性が求められ，女子教育が国家政策の中に取り込まれた．女子教育政策の基本的な方針は，「良妻賢母主義」教育である[26]．当時の文部大臣は【婦女子ト云フモノハ将来結婚シテ妻トナリ母トナル】のが【当然ノ身ノ成行キ】という前提に立って女子教育を論じた[25]．

（2）高等女学校の学科課程

明治28年，高等女学校規定による学科課程は，国語・外国語・歴史・地理・数学・理科・家事・裁縫・習字・音楽・体操　であり，その中で家事は【家事ハ衣食住，看病，育児，家計簿記其ノ他一家ノ整理，経済ニ関スル事項ヲ授クヘシ】としている[25]．授業科目の中に「看病」が位置づけられている．

（3）女学校令

明治32年1899年高等女学校令．女学校を中学校と同じ正式な学校として認定する法令「高等女学校令」を契機に女学生数は急増する．しかし，富裕な家庭の子女だけが女学校へ進学した．

明治末ごろから中層階級にも広まってきた．（図1）しかし，その大半は「嫁入り」資格としての「女学校出」という肩書きを持つためであった．下田は，英仏独などの女子教育や，家庭教育について学んだ．そして帰国した後，中層以上の女子だけでなく地位資格を問わず，【下層婦人の徳を高め，智を得る】と主張し，帝国婦人協会を結成して，中層以下の女子教育を普及させた．

2）　下田歌子が女性に与えた影響

（1）下田歌子について

下田歌子（1854～1936）は岐阜県の旧岩村藩主の長女として生まれる．明治5年（1872），宮中で皇后陛下に和歌を賞せられて「歌子」の名を賜ったという．（本名銘（せき））．明治13年（1880）27歳，旧丸亀藩士下田猛雄と結婚．自宅に私立桃夭（とうよう）学校を創設して，上流子女の教育に当たる．その4年後の明治17年夫と死別．明治18年（1885）32歳，華族女学校（のちの学習院）の教授となる．明治26年（1893）40歳，欧米各国女子教育状況視察のため渡欧する．明治33年帝国婦人協会新潟支会を置き，付属新潟女子工芸学校（現在新潟青陵学園）を開設する．明治39年（1906）53歳，華族女学

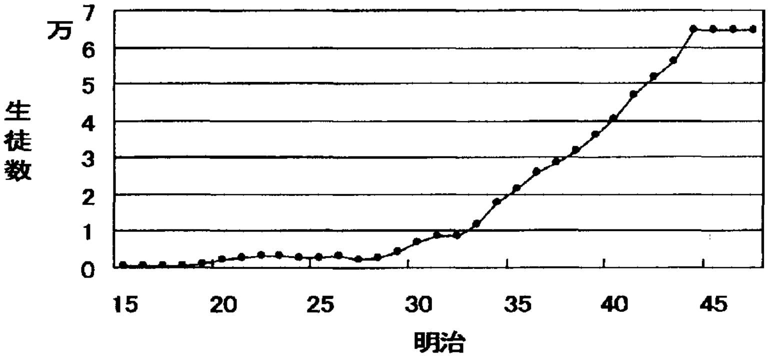

図1：高等女学校　生徒の推移

学生百年史Ｐ４８６　教育統計から作成[21]

Akita University

校廃止で学習院女子部となったため，学習院教授兼女学部長に任ぜられる．翌年に辞任．明治41年（1908）55歳，「賢母良妻」の教育理念の元，実践女学校を設立し，女性の経済的自立の主眼に，女子工芸学校を設立する．順心女学校，明徳女学校の校長を兼ねて女子教育に尽くした．明治・大正を代表とする女性教育者，歌人である[19),22)~26)]．

(2) 下田歌子が女性に与えた影響

当時の女性の職業は，主として製糸紡績での労働で安価な使い捨ての労働者と，そのほか女教師・看護婦・産婆・とごく少数の電話交換手などがあるのみであった．従って多くの女性は主婦として家庭に入った[18)]．

下田は明治16年の『家政学』のなかで，【専門の看護婦の為にする目的にあらずして，主婦が家族のためにすべき事として】と，家庭生活の中で主婦が行う看護について述べられている．江戸時代の『女訓書』で女が最も期待されていたことは，男尊女卑のもとで夫や姑に従順な妻や嫁になることであり，母親役割はほとんど言及されていなかった．しかし明治に入り，近代国家の建設と，それを支える国民の養成が国家課題となる中で，家事と育児が女性，とりわけ「主婦」の重要な役割として強調され，女子教育で主張されていった．このころから「主婦」という言葉が使われるようになった[23)]．下田は，家庭は女性が中心人物でなければならない．女子は劣った存在と見なされるのではなく，女性の性質をいかし，家庭にあって男とは異なる重要な役割を果たす存在であると主張した．この新しい家庭像，新しい主婦像を描いたことが，多くの女性に支持されたと考える．

3） 書物の内容

(1) 明治26～39年の書物

①明治26年『家政学』

女学校のテキストとして使われた明治26年の『家政学』[27)]では，衣食住の他，母性・小児の衛生，経済，看護について記載されている．発病したときの心得として，先ず脈拍，体温，呼吸を測定し，医師に連絡すると書かれており，主治医については信用できる良い医師の選択法の心得が書かれている．

体温・脈拍・呼吸について測定方法，正常値および異常の場合はすぐに医師に報告するように書かれ，体温の測定方法についてみてみると，

> 體温は通常，朝夕二回に，測るべし～略～體温器は腋下に挿みて檢するを常とす．其局部の汗を拭ひて，肘を脇側に密接せしめ，其間に挿入し十五分間にして其度数を點檢すべし．〈pp185〉

と測定部位，測定時間，観察について現代の同じ測定方法であり，詳細に説明している．

咳に対しては，

> 咳，頻繁に出でゝとまらざる時は，枕を高くして半臥の状を為すべし，〈pp187〉

嘔吐に対して，

> 衣服を寛げ静かに安臥せしむべし～略～冷水，氷，及び酸味の飲料を與へて可なり〈pp187〉

と咳，嘔吐時に安楽な工夫や症状を緩和させる方法について書かれている．

便通及び排泄物について

> 度数を病床日誌に記し分量も能く注意し置くべし．病人の便は一昼夜は貯へ置きて醫師に示すべし痰は硝子製の唾壺に貯へ蓋を能く密閉し置きて，醫師の来たる毎に示すべし．〈pp185〉

量や回数についての記載や排泄物の処理の方法，医師への報告について述べている．

病室の環境については，

> 静閑なる場所，空気の流通と日光の映射とは殊に充分にして患者の常に爽快を感ずるやうにあるべし，病室は最も良く洒掃して常に清潔ならしむべし〈pp183〉

と，清潔な環境を整えるとある．

身体の清潔については，入浴するときの注意や清拭の方法が書かれている．

> 清潔なる手拭を冷水にて絞り，身体を拭ふはよし．又温湯にて絞るも可なり．総じて，濡手拭にて，全身を拭ひたる後は必ず乾きたる西洋手拭やうの物にて湿り気無き程に能くゝ摩擦すべし〈pp184〉

とあり，清拭後の気化熱で体を冷やさないような配慮が示してある．

②明治30年『家庭要訓』[28)]は婦人向けに書かれたものである．看護の内容は『家政学』とほぼ同じであるが，老人についての取り扱いと題して，

> 老人の扱ひは総て幼児或ひは病人を保護するが如く～略～注意を要する．過去道理を以て，不道理と語り，不道理を以て道理と語り～略～気長く丁寧に取り扱ふべし．〈pp3-4〉

老人の気質や接し方，その他食事や衣服についての注意点が述べられている．

③明治31年の『婦女家庭訓』[29)]も婦人向けの書物である．看護について体温測定等の具体的な方法の記載はなかったが，

> 家人の常に屡々罹り易き病は，寒冒及び消化不良の類なりと，記載されており，寒冒について　衣服，住居に就きての不注意又は運動不十分なる．皮膚の不潔なる等により招き，腸胃病は，食物の過不及び不消化より起因する〈pp20〉

と記載され，病室・空気・身体を清潔にする事や食事

Akita University

の注意点が書かれている．また病人の精神面の看護について，貝原篤信の『養生訓』を用いてその重要性を述べている．

④明治32年の『家事要訣』[30] 以降の書物から伝染病について記載されている．当時深刻な社会問題であった伝染病に対しては，

家族に伝染病者を発たる時は速やかに先づ，老人，小児を遠ざけしめ，患者を別室に移して，直ちに醫師を招き手は其出入毎に洗ふべし．又諸排泄物に触れたる手は，苟且にも，口中へ入れる可らず，排泄物の器も能く消毒し〈pp119〉

と抵抗力の弱った老人や小児を隔離することや，伝染病の予防として手洗いの必要性について書かれている．この頃の書物より「衛生」についての記載が増えていく．

その他に瘋癲病（精神病）についての記載があり

狂暴を極めて，怒り罵ることありとも，側らに在る人は，すこしも逆ひ憤る気色無く，温顔を以て，之に接し〈pp212〉

と接し方について書かれている．

⑤明治33年『新選家政学』[31] は女学校のテキストである．『家政学』に書かれた看護の方法と類似している．貯蔵すべき薬品と題して

百倍の石炭酸・アンモニア水・樟脳丁幾・重炭酸曹達・脱脂綿・體温器・浣腸器・氷嚢等〈pp71〉

家庭で常備しておく物，伝染病の予防に必要な消毒薬が記載されている．

⑥『家政学講義』[32] もこれまでと同じような内容で看病について述べられている．

（2）明治39年以降の書物

「衛生・清潔」を中心に記載されている．内容は，疾病の予防，健康の保持増進について記載しており，病魔の予防，換気の方法，衣服や寝具，飲料水，運動，等の詳細が書かれている．

衛生の目的は【病を未発に防ぐ】【寿命を長くしようとする】【普通の健康体の人でも猶それに止らず，益々体力を増進】とし，家庭での衛生の心得について生活に即して述べている．

①明治39年『女子の衛生』[33] は衛生の重要性を解剖・生理の視点で説明している．「伝染病の予防及び消毒」の章で，

薬用消毒には石炭酸水を用ふるのである．衣類の消毒や室内の消毒はこれを用ひ又便所の消毒にも用ひ，手足を石炭酸水で洗った時は更に湯又は水で洗ふが宜しい．〈pp145〉

と，伝染病を撲滅するための消毒方法の詳細が書かれている．その他，換気の方法・月経時の注意・妊娠や出産の心得が書かれている．

運動をよくする時は血液の循環をよくし筋骨を強くし胸郭を擴張し～略～體中に入るところの栄養分はみな吸収されて～略～身體が強壮になる．〈pp100〉

これまでは病気の予防だけであったが，さらに健康の増進について運動や清潔が書かれている．

②2年後の『家事実修法』[34] では，

精神までも清潔にするのがよろしい．名家の談話を聞き，時としては高尚なる音楽を聴く〈pp46-47〉

と，これまの衣食住の衛生に加え精神の衛生の必要性が述べられている．

③明治43年の『婦人常識の養成』[35] では，

個人の衛生とは，自分が病気に罹らないように注意することで，公衆衛生とは～略～飲料水となってる所で，知らぬ顔で不潔な物を洗ったり～略～公衆衛生を誤ると様では，伝染病などを起しました時には，その害の及ぶところは測り知ることが出来ませぬ．〈pp343-344〉

と個人の衛生と公衆衛生に分けて衛生の必要性を述べている．

④明治45年の『賢母と良妻』[36] は

これを選びこれを縫いこれを納め猶又これを清潔にすべく，汚るれば洗ひ，皺つけれぱ伸ばし色褪るれば染め〈pp17-18〉

と，衣服の清潔について書かれている．その他，食事や住まいの清潔について述べられている．

⑤大正4年『家庭』[37] では，病人の看護が記載されており，内容は明治30年代の書物と類似している．しかし，これまでと違って，【看病する人は病理の大要を心得，衛生の観念を持っていなければならぬ】と，衛生観点から述べられている．また，

非常な重病でありますか，或ひは伝染性の病気であれば大抵のところでは家に置くよりも寧ろ病院に入れる方が宜しうございませう〈pp396-397〉

と明治26～35年までの書物には見られなかった入院や病院についての事が述べられている．

⑥明治43年の『女子の礼法』[38] は礼儀・作法が中心として書かれている．「衛生」については，

梅雨の季節は～略～なるべく飲食物の気をつけて少しでも悪い物は食べてはなりませぬ．掘井戸などを使う所ではなるべく一旦沸立せねば飲まぬようにしたほうが宜しい．〈pp107-108〉

と，梅雨時期の食中毒の予防について書かれている．

大正2年『日本の女性』[39]，大正11年の『婦人文化講演集』[40] には「衛生」や「看護」の記載はなかった．

Akita University

4．考　察

1）家庭看護が書かれた背景

教育を受けた看護師は少なく，明治21年当時の，派出看護[注1)]料は普通病で月25円，伝染病は2倍の月50円で，東京の公立小学校女子教員の平均月給は8円と比べると，看護師の対象は裕福な家庭だけであった[41)]医師については，すでに明治15年，医師数37000（人口1000人弱に1人）と現在に近い割合だった．従って，病人の療養は医師の往診と，主婦の看護が一般的であった[42)]．明治政府はドイツ医療を採用し，医学教育はすでに始まっており，医学は看護よりいち早く発展していった．下田の著書は，体温・脈拍測定や正常値等，詳細に観察する方法や，清潔の方法等が記載されている．経験的な看護ではなく，医学的な知識が含まれている．看護を担う主婦は医師に報告するために，観察，記録の知識が求められたと考える．従って，家庭での看護方法，看護の知識が必要であった．

大正4年に「看護婦規則」が発令した頃から，医師・看護師，病院数が急速に増え，病院での看護が一般的となっていく．重病や伝染病になったときは，病院で医療，看護が受けられるようになり，家庭の看護の記載にも変化がみられた．

2）「衛生」について書かれた背景

明治時代は伝染病が大流行した．当時の背景として，文明開化とはいえ，環境衛生は江戸時代とさほど変わらず，汽車が動いて，上下水道もほとんどなく屎尿もたれながし，さらに人々の衛生に対する知識不足もあり伝染病の大流行につながった[43)]．

当時，消毒薬として石炭酸水が消毒剤として一般的に使用されていた．しかし，その使用法について【袋に入れて天井へ吊り下げ悪臭を去る】のを目的としており，消毒と防臭の区別がつかなかった事から[44)]，衛生について一般の人々は意識が低かったといえる．明治中期以降の下田の書物には，伝染病の予防，健康の保持増進について記載されており，明治41年の『家事修法』の中では【家政を主(と)って行く上に，最も眼目とする處(ところ)は実にこの衛生と経済との外にない】と衛生に対する必要性を述べている．家庭では伝染病予防のために，衛生問題が重要課題であった．下田は【努めて源今の社会に適応すべき実学を教授】[26)]と，当時の日本の現状に合う教育観を持っており，社会問題を婦人教育に反映させていたことが窺える．

5．結　語

明治中頃までは，病院は少なく看護師の教育は，始まったばかりである．そのため，看護は家庭で行われるのが主流であり，その必要性から看護の方法が記載されていた．明治39年以降は病院での施設看護の発展，伝染病予防に対する衛生の啓蒙活動等から，家庭の看護の方法に加え，健康の保持増進・衛生について記載されるようになった．社会背景の変化によって，家庭の看護の内容も変化していたことがわかる．今回，大正時代までを分析した．下田歌子はなぜ看護の知識があったのかは今回の研究では言及できなかった．

下田歌子は昭和11年83歳で死去する．著者が他界後，昭和は戦争，貧困，乳児死亡率の上昇など，また新たな健康問題，社会背景を向かえる．これにより，家庭での看護や衛生管理についてどのような変遷を遂げて現代に至るのか，今後の課題としたい．

注1）：派出看護とは病人との個人契約のもと看護婦が病人のいる家へ出向いて病人に付き添って看護することをいう．

文　献

1）中村美智子，古川龍子：翻訳的家政書にみる看護法（その1　明治前期）．看護教育：801-807，1990
2）亀山美知子：明治期女子教育における看護教育の位置づけについて．第16回日本看護学会集録総合看護：95-97，1985
3）後閑菊野：家事教科書．成美堂・目黒書房合梓，東京，明治31年，pp30-123
4）塚本はま子：家事教本．金港堂書籍，東京，明治33年，pp139-157
5）後閑菊野：家事教科書 増訂19版．成美堂・目黒書房，東京，明治43年，pp101-133
6）後閑菊野：家事提要．成美堂・目黒書房，明治35年，東京，pp112-129
7）嘉悦孝子：家政学講話．同文館，明治41年，東京，pp281-305
8）小出新次郎：家庭節用．女子裁縫高等学院出版部，明治43年，東京，pp66-76
9）田中義能：家庭教育学．同文館，東京，明治45年，pp230-258
10）飯島半十郎：家事経済書．博文館，東京，明治23年，pp118-139
11）高橋金一郎：通俗看病法．博文館，東京，明治26年，pp1-134
12）博文館編集局編：明治節用大全 伝家の宝典．東京，明治27年，pp636-674
13）民友：家庭衛生 家庭叢書大6巻．東京，明治27年，pp106-117
14）足立栗園：家政と衛生 家庭教訓．積善館，大阪，明治34年，pp91-99

Akita University

15）帝国婦人学会編：婦女子の本分　家事実用．広文堂，東京，明治38年，pp205-253
16）石原貴久太郎：新編家庭衛生．博文館，東京，明治41年，pp337-353
17）東京婦人学会：花嫁の準備と実務．二松堂，東京，明治43年，pp51-55
18）女性誌総合研究会編：日本女性史第４巻近代．東京大学出版会，東京，1985.2，pp149-184
19）実践女子大学図書館：下田歌子電子図書館．入手先 <http://www.jissen.ac.jp/library/shimoda/index.htm>（参照 2004/08/04）
20）中嶌　邦：近代日本の女子教育史をめぐって．歴史評論 No.385：pp65-73，1978
21）文部省：学生百年史．帝国地方行政学会，S47.10 pp212-363，pp33-34，図１，pp486-487
22）衛藤君代，熊沢亜矢子他：下田歌子先生の食物教育について．実践女子大学生活科学部紀要32号：21-27，1995
23）船崎恵美子：学粗 下田歌子「香雪叢書」他にみられる家庭教育を女性の社会進出についての一考察．実践女子短大評論　第15号：69-80，平成16年
24）日本女性人名辞典：日本図書センター．1993 p534
25）大塚信一：女の文化近代日本文化論８．岩波書店，東京，2000．2，pp25-44，pp125-139，pp181-182
26）大関啓子：「まよひなき道」－下田歌子英国女子教育視察の軌跡．実践女子大学文学部紀要 第36集：1-21，1994
27）下田歌子：家政学，博文館，東京，明治26年，pp183-185，p187
28）下田歌子：家庭要訓．同文館，東京，明治30年，pp3-4
29）下田歌子：婦女家庭訓．博文館，東京，明治31年，p20
30）下田歌子：家事要訣．博文館，東京，明治32年，p119，p212
31）下田歌子：新選家政学．金港堂書籍株式会社，東京，明治31年，p71
32）下田歌子：家政学講義．北海道教育会，札幌，明治35年，pp154-164
33）下田歌子：女子の衛生．富山房，東京，明治39年，p100，p145
34）下田歌子：家事実修法／衛生経済．育成会，東京，明治41年，pp46-47
35）下田歌子：婦人常識の養成．実業之日本社，東京，明治43年，pp343-344
36）下田歌子：賢母と良妻．富山房，東京，明治45年，pp17-18
37）下田歌子：家庭．実業之日本社，東京，大正４年，pp396-397
38）下田歌子：女子の礼法．国民書院，東京，大正５年，pp107-108
39）下田歌子：日本の女性．実業之日本社，東京，大正２年
40）下田歌子：婦人文化講演集．民友社，東京，大正11年
41）高木佐知子：派出看護婦の歴史について．クリニカルスタディ：68-73，1985
42）橋本寛敏ら監修：病院管理体系第１巻　病院史．医学書院，1972，ppP114-122
43）立川昭二：病気の社会史 文明に探る病因．日本放送出版協会，東京 1997.2，pp169-198
44）宗田一：図説日本医療文化史．思文閣出版，京都，1992，p412
45）坪井良子：創立期の日本キリスト教婦人会矯風会の活動における看護の社会的意義．第24回日本看護学会集録 総合看護：70-73，1993
46）厚生局医務局：医制百年史．ぎょうせい，記述編・資料編共，東京，1976，p565，p567，p587
47）看護研究会編：看護学生のための日本看護史．医学書院，東京，1989，p66
48）中村美智子，吉川龍子：日本的家政書にみる看護法（その２　明治中期）．看護教育：865-869，1990
49）中村美智子，吉川龍子：本格的家政書にみる看護法（その３　明治後期）．看護教育：37-41，1991
50）武田　京子：近世から近代へ女子家庭教育の変容．家庭科教育：pp41-45，1988

Akita University

表1．分析対象文献

発刊年	書名	出版社	出版地
（1）明治２６年	家政学	博文館	東京
（2）明治３０年	家庭要訓	同文館	東京
（3）明治３１年	婦女家庭訓	博文館	東京
（4）明治３２年	家事要訣	博文館	東京
（5）明治３３年	新選家政学	金港堂書籍株式会社	東京
（6）明治３５年	家政学講義	北海道教育会	札幌
（7）明治３９年	女子の衛生	富山房	東京
（8）明治４１年	家事実修法／衛生経済	育成会	東京
（9）明治４３年	婦人常識の養成	実業之日本社	東京
（１０）明治４５年	賢母と良妻	富山房	東京
（１１）大正　２年	日本の女性	実業之日本社	東京
（１２）大正　４年	家庭	実業之日本社	東京
（１３）大正　５年	女子の礼法	国民書院	東京
（１４）大正１１年	婦人文化講演集	民友社	東京

表２：使用する文献とその内容

書名 発刊年 （著書の年齢）	主な書の内容	看護（看病）に関する記載内容
家政学 明治２６年 （４０歳）	住居・禮法・粧飾・書簡・贈品・看病法・母親の衛生及び小児の教養法・家事経済・衣服・飲食・本邦料理・食物貯蔵法・婢僕の管理	主治医・病室の環境・病床日誌・浴法・飲食物・便通・体温・脈拍・発汗・嘔吐
家庭要訓 明治３０年 （４４歳）	主婦のつとめ・親戚朋友の取り扱い・婢僕の取り扱い・金銭の取り扱い・病人の取り扱ひ及ひ負傷の手当て・衣服に就きての注意・飲食に就きての注意・住居も就きての注意・儀式に就きての注意・書信、昔物に就きての注意	看護の心得・発病の手当て・負傷の手当て・老人の取り扱い・小児の取り扱い
婦女家庭訓 明治３１年 （４１歳）	主婦の心得・夫に対する心得・父母に対する心得・舅姑に対する心得・子女に対する心得・親戚に対する心得・病人に対する心得	看護のこと・養生訓・通例罹り易き病・病室
家事要決 明治３２年 （４２歳）	総論・家内衛生・看病法・衣服・家事経済・家政簿記法・飲食・住居	看病法・発病及び負傷の手当て・主婦の注意・伝染病の注意・瘋癲病の注意・中毒の注意・体温、脈拍、呼吸・主治医・服薬の心得・病室・衣服・食事

Akita University

表２のつづき

新選家政学 明治３３歳 （４３歳）	総論・家内衛生・家事経済・飲食・衣服・住居・小児教養・家庭教育・養老・看病・交際・避難・婢僕の使役	発病・伝染病・貯蔵すべき薬品・負傷の手当て・中毒の手当て・主治医・病室・体温・脈拍・呼吸・咳・嘔吐・発汗・入浴・患者の動静
家政学講義 明治３５年 （４５歳）	家政学総論・家内衛生・家事経済・飲食・衣服・住居・家屋の構造・小児教養・家庭教育・養老・看病・交際・避難・婢僕使役	発病・負傷及び中毒・主治医・病室・老人の衣食住・病人の動静及び保護・老人の疾病
女子の衛生 明治３９年 （４９歳）	衛生概要・空気と光線と・衣食住・運動と睡眠と・精神の作用・遺伝と伝染病と・妊娠・出産・哺乳・母親の摂養・小児の摂養	
家事実修法／衛生経済 明治４１年 （５１歳）	主婦の注意・衛生と経済と・食物の衛生と経済・衣服の衛生と経済・住宅の衛生と経済	
婦人常識の養成 明治４３年 （５３歳）	現代婦人の覚悟・婦人と慈恵・婦人と勇気・婦人と信念・婦人と宗教・婦人と教育・婦人と常識・婦人と学問・婦人と職業・婦人と手芸・婦人と礼法・婦人と遊芸・婦人と装飾・婦人と交際・婦人と趣味・婦人と衛生思想附家内衛生の概要・婦人と経済思想附家事経済の概要・理想と現実・希望及び快楽・婦人の結婚問題・婦人の長所短所・主婦としての婦人附主婦の心得・母としての婦人附母親の心得・娘としての婦人附少女の心得・国家と婦人・婦人の十徳	
賢母と良妻 明治４５年 （５９歳）	妻の範囲・何をか良妻といふ・東洋の良妻傳・母の範囲・何をか賢母といふ・東洋の賢母傳・西洋の良妻傳・西洋の賢母傳・妻の範囲（衣服の清潔）	
日本の女性 大正２年 （６０歳）	古代の女性・中古代の女性の社会状態と女性・平安期の女性・鎌倉南北朝、足利時代の女性　（日本の女性を史伝的にまとめた物）	
家庭 大正４年 （６２歳）	家庭の意義・家庭衛生の研究其の他・家事経済・育児と家庭教育・家庭の趣味娯楽	家庭備品付薬品・医師の指図と入院・看護及び看護人・病床日誌・体温・脈拍・服薬・浣腸・罨法・氷嚢・発汗など
女子の礼法 大正５年 （６３歳）	礼儀作法について 梅雨中の注意（衣食住の衛生について）	
婦人文化講演集 大正１１年 （６９歳）	明治時代の名婦について	

注１）～～～　は看護，看病について記載されている内容
注２）＿＿＿　は衛生について記載されている内容

Akita University

"Nursing in the Home" the Meiji to Taisho Era as seen in Utako Shimoda's Book.

Ayako Kobie Noriko Ishii

Course of Nursing, School of Health Sciences, Akita University

In this study research was undertaken into home nursing from the book of educator Utako Shimoda who influenced female students and women of the Meiji and Taisho Eras.

One aspect discussed in the book is that there were few hospitals from Meiji 26 to Meiji 39, and nursing education had only just started. Therefore, nursing was primarily carried out in the home, and nursing techniques were recorded in answer to this necessity. Measurement and properties of temperature and pulse, treatment of vomiting, and blanket baths are amongst the techniques described.

From Meiji 39, improvement in health and hygiene was indicated through the development of nursing in hospitals, and instruction in proper hygiene to prevent disease.

The contents change as the social background does.